

デーヴォ ガイド



2026.5.18-24

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。(1~3つ)
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディボーションの分かち合い(なるべく短く)
- ④預言の祈り(主の御心を宣言して祈り)をします。

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ディボーションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族でいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと?
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか?(または誉めたいですか?)1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか?
- ④互いの必要のために祈りましょう。

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは?(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか?(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか?(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか?)

④この世にあって何を実践しますか?

4:9 私はこう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。こうして私たちは、世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。

4:10 私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者です。私たちは弱いのですが、あなたがたは強いのです。あなたがたは尊ばれていますが、私たちは卑しめられています。

4:11 今の時に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、ひどい扱いを受け、住む所もなく、

4:12 労苦して自分の手で働いています。のしられては祝福し、迫害されては耐え忍び、4:13 中傷されては、優しいことばをかけています。私たちはこの世の屑、あらゆるもの、かすになりました。今もそうです。

4:14 私がこれらのことを書くのは、あなたがたに恥づかしい思いをさせるためではなく、私の愛する子どもとして諭すためです。

4:15 たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人もいる、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。

4:16 ですから、あなたがたに勧めます。私に倣う者となってください。

4:17 そのために、私はあなたがたのところへテモテを送りました。テモテは、私が愛する、主にとって忠実な子です。彼は、あらゆるところのあらゆる教会で私が教えているとおり、キリスト・イエスにある私の生き方を、

あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。

4:18 あなたがたのところに私が行くことはないだろうと考えて、思い上がっている人たちがいます。

4:19 しかし、主のみこころであれば、すぐにもあなたがたのところに行きます。そして、思い上がっている人たちの、ことばではなく力を見せてもらいましょう。

4:20 神の国は、ことばではなく力にあるのです。

4:21 あなたがたはどちらを望みますか。私があるあなたがたのところに、むちを持って行くことですか。それとも、愛をもって柔和な心で行くことですか。

当時のローマ帝国では、戦いに勝った将軍はその勝利を誇るために、戦利品を見せながら市街をパレードすることが許されてきました。そしてその行列の「しんがり」には敗戦国の捕虜たちが引き立てられていたのです。彼らは闘技場などで野獣の餌食になる運命でした。パウロは、自分たち使徒とコリントの人々を対比させるためにこの譬え(たとえ)を用いました。

コリント教会の人々は自分の主張や都合を実現させようとし、違う考えを受け入れないで王のようになろうとしていて、それはまるで凱旋将軍のように尊大だということです。

一方パウロたちは捕虜のようであり、何ら自分たちにとって有利なことはないということです。パウロはコリントの人々に、本当の信仰とは何かを知らせたかったのでしょう。またクリスチャンの生き方として本当の誇りとは、また価値とは何かを知らせたかったのでしょう。分裂・分派は、ただそれを回避すればよいという問題ではなく、パウロにとっては霊的教育の絶好のチャンスだったのです。

主の栄光と摂理のために、自分の立場や主張をあえて通さずに、ただ忠実に仕えるというこは、すばらしい生き方なのです。まさにパウロに「ならう者」となりましょう。

「そのような生き方をみんなにしてみたい」と願う人もいることでしょう。そのためにはテモテのような模範が必要です。それを願っている自分自身がまず模範となることです。

①神のみこころは？(信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど)

②どんな思いになりましたか？(気持や願いなど)

③生き方にどう適用しますか？(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか)

④この世にあって何を実践しますか？



➤ 19日 火曜

コリント I



- 5:1 現に聞くところによれば、あなたがたの間には淫らな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどの淫らな行いで、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。
- 5:2 それなのに、あなたがたは思い上がっています。むしろ、悲しんで、そのような行いをしている者を、自分たちの中から取り除くべきではなかったのですか。
- 5:3 私は、からだは離れていても霊においてはそこにいて、実際にそこにいる者のように、そのような行いをした者をすでにさばきました。
- 5:4 すなわち、あなたがたと、私の霊が、私たちの主イエスの名によって、しかも私たちの主イエスの御力とともに集まり、
- 5:5 そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。
- 5:6 あなたがたが誇っているのは、良くないことです。わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませることを、あなたがたは知らないのですか。
- 5:7 新しいこねた粉のままにいられるように、古いパン種をすっかり取り除きなさい。あなたがたは種なしパンなのですから。私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです。
- 5:8 ですから、古いパン種を用いたり、悪意と邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。
- 5:9 私は前の手紙で、淫らな行いをする者たちと付き合わないようにと書きました。

- 5:10 それは、この世の淫らな者、貪欲な者、奪い取る者、偶像を拝む者と、いっさい付き合わないようという意味ではありません。そうだとしたら、この世から出て行かなければならないでしょう。
- 5:11 私が今書いたのは、兄弟と呼ばれる者で、淫らな者、貪欲な者、偶像を拝む者、人をそしる者、酒におぼれる者、奪い取る者がいたなら、そのような者とは付き合いはいけない、一緒に食事をしてはいけない、ということです。
- 5:12 外部の人たちをさばくことは、私がすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。
- 5:13 外部の人たちは神がおさばきになります。「あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」

「父の妻を妻に」とは、あらゆる点で問題の不品行です。それでも「誇り高ぶっている」ということは、おそらく別の面では優れているのでしょう。ある面で優れていても、他の面で問題があれば、反省すべきです。

パウロが「さばきました」というのは、祈りの中で神様のさばきに委ねたのだと思われまます。「サタンに引き渡した」とは、サタンの誘惑や苦しみがあってもやむをえないということだと思われまます。しかしそれによって「彼の霊が主の日に救われる」ということは、最終的には、罪を犯している者が苦しみの中から悔い改めて、主のみこころに立ち返ることを願っているということです。このように主のみこころに反する人に対しては、委ねるしかない場合がありますが、それは回復を願ってのことです。

パウロはクリスチャンであっても「淫らな者、貪欲な者、偶像を拝む者、人をそしる者、酒におぼれる者、奪い取る者」とは交際するなと言いま

す。これは罪が教会に蔓延しないためです。教会が罪からきよめられるためには二つの道があります。ひとつは罪ある者を追い出すこと、もうひとつは罪を悔い改めて変わるように励ますことです。危機的な状況ではコリントのような処置が必要な場合があります。主に聞き、そして共同体で一致して対処することが重要です。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（気持や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



➤ 20日 水曜

コリント I



6:1 あなたがたのうちには、仲間と争いを起こしたら、それを聖徒たちに訴えずに、あえて、正しくない人たちに訴える人がいるのですか。

6:2 聖徒たちが世界をさばくようになることを、あなたがたは知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるのに、あなたがたには、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。

6:3 あなたがたは知らないのですか。私たちは御使いたちをさばくようになります。それなら、日常の事柄は言うまでもありませんか。

6:4 それなのに、日常の事柄で争いが起こると、教会の中で軽んじられている人たちを裁判官に選ぶのですか。

6:5 私は、あなたがたを恥じ入らせるために、こう言っているのです。あなたがたの中には、兄弟の間を仲裁することができる賢い人が、一人もいないのですか。

6:6 それで兄弟が兄弟を告訴し、しかも、それを信者でない人たちの前ですのですか。

6:7 そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。どうして、むしろ不正な行いを甘んじて受けないのですか。どうして、むしろ、だまし取られるままでいないのですか。

6:8 それどころか、あなたがた自身が不正を行い、だまし取っています。しかも、そのようなことを兄弟たちに対してしています。

6:9 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、

偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、

6:10 盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしめる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。

6:11 あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。

教会の中で意見の食い違いがあったり、それが発展して批判し合うことは当時もあったようです。人間の集まりですからあり得ることでしょう。その場合、信仰によっての解決すなわち神様に聞いて、聖霊と聖書によって解決するのがクリスチャンです。

コリントの人々は神に聞くことを忘れて、自分が勝ちたいばかりに、神を信じない人までも仲間にして争ったようです。

「そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。どうして、むしろ不正な行いをも甘んじて受けないのですか。どうして、むしろ、だまし取られるままでいないのですか。」とは、傾聴すべきことばです。主を知っている人の信仰はここにあります。

多くは相手に勝とう、自分が正しいことを証明しようとするのですが、その争いがすでに「敗北」です。たとえ自分の意見どおりに教会が動いても、霊的に疲労した教会を見て喜ぶのはサタンです。「思い通りの結果が出た」「私の意見が用いられた」と喜んでいても、敗者なのです。

主の栄光だけを求めて、自分はなきものになりましょう。そうすれば主から勝利をいただけます。そして「聖なる者」「義」なる者としての生き方になるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（気持や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



21日 木曜

コリント I



6:12 「すべてのことが私には許されている」と言いますが、すべてが益になるわけではありません。「すべてのことが私には許されている」と言いますが、私はどんなことにも支配されはしません。

6:13 「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある」と言いますが、神は、そのどちらにも滅ぼされます。からだは淫らな行いのためではなく、主のためにあり、主はからだのためにおられるのです。

6:14 神は主をよみがえらせましたが、その御力によって私たちも、よみがえらせてくださいます。

6:15 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。それなのに、キリストのからだの一部を取って、遊女のからだの一部とするのですか。そんなことがあってはなりません。

6:16 それとも、あなたがたは知らないのですか。遊女と交わる者は、彼女と一つのからだになります。「ふたりは一体となる」と言われているからです。

6:17 しかし、主と交わる者は、主と一つの霊になるのです。

6:18 淫らな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のもので。しかし、淫らなことを行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。

6:19 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。

6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られ

たのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。

遊女という言葉がありますから、これは性的な問題を扱っています。もちろん、私たちは律法からは自由になりました。そしてだからこそ、自分自身で何が良いことかを選び取らなければいけないのです。食物も大切ですが、性的な罪をさけることはさらに重要です。それは霊的な影響を及ぼすからでもあります。そのことは16節に述べられています。

神様のきよさ、相手を思いやるきよき愛、主に従う忠実さなど、「神の栄光」を現すことのために力を尽くしましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（気持や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



22日 金曜

コリント I



7:1 さて、「男が女に触れないのは良いことだ」と、あなたがたが書いてきたことについてですが、

7:2 淫らな行いを避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。

7:3 夫は自分の妻に対して義務を果たし、同じように妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。

7:4 妻は自分のからだについて権利を持ってはおらず、それは夫のものです。同じように、夫も自分のからだについて権利を持ってはおらず、それは妻のものです。

7:5 互いに相手を拒んではいけません。ただし、祈りに専心するために合意の上でしばらく離れていて、再び一緒になるというのならかまいません。これは、あなたがたの自制力の無さに乗じて、サタンがあなたがたを誘惑しないようにするためです。

7:6 以上は譲歩として言っているのであって、命令ではありません。

7:7 私が願うのは、すべての人が私のように独身であることです。しかし、一人ひとり神から与えられた自分の賜物があるので、人それぞれの生き方があります。

7:8 結婚していない人とやもめに言います。私のようにしていただけるなら、それが良いのです。

7:9 しかし、自制することができないなら、結婚しなさい。欲情に燃えるより、結婚するほうがよいからです。

7:10 すでに結婚した人たちに命じます。命じるのは私ではなく主です。妻は夫と別れては

いけません。

7:11 もし別れたのなら、再婚せずにいるか、夫と和解するか、どちらかにしなさい。また、夫は妻と離婚してはいけません。

7:12 そのほかの人々に言います。これを言うのは主ではなく私です。信者である夫に信者でない妻がいて、その妻が一緒にいることを承知している場合は、離婚してはいけません。

7:13 また、女の人に信者でない夫がいて、その夫が一緒にいることを承知している場合は、離婚してはいけません。

7:14 なぜなら、信者でない夫は妻によって聖なるものとされており、また、信者でない妻も信者である夫によって聖なるものとされているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れていることになりましたが、実際には聖なるものです。

7:15 しかし、信者でないほうの者が離れて行くなら、離れて行かせなさい。そのような場合には、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。神は、平和を得させようとして、あなたがたを召されたのです。

7:16 妻よ。あなたが夫を救えるかどうか、どうして分かりますか。また、夫よ。あなたが妻を救えるかどうか、どうして分かりますか。

エペソ人への手紙に結婚の崇高な意味を述べているように、パウロは決して結婚を情欲の制御のためだけとは考えてはいません。ただパウロは現実を直視していました。結婚は神様のきよい秩序の中にあって祝福されたものですが、「サタンが誘惑しない」ようにすることが大切なのです。

私たちも、サタンの誘惑には弱者であることを認めつつ、しかし神の祝福の道に歩めるように、聖霊に頼っていきましょう。

結婚についてのパウロの教えには特徴があります。ひとつには主の永遠の真理と、それを適用したパウロ自身の考えです。

永遠の主のみこころは、クリスチャンは離婚はしないということです。結婚は主の愛を表すものだからです。しかしそれは相手にもよることですから、どうすることも出来ない場合があります。パウロは「もし信者でないほうの者が離れて行くのであれば、離れて行かせなさい。」と、現実的なアドバイスもしています。

ここでは様々な事例についてパウロのアドバイスがありますが、どれも共通しているのはクリスチャンである方が、自分中心で判断しないということです。離婚を決めること、信仰の問題で去り行く相手を引き止めることはしないようにということです。

クリスチャンはあくまでも結婚において主の栄光を表すものですが、それは双方の信仰の一致によって成り立つものです。不信者の配偶者について「必ず救われる」と言うことはできないのです。救いは主の主権によるものです。

この箇所を読む場合、それぞれの状況が違いますから、自分の場合をよく理解しましょう。そして主の永遠の原則に従いつつ、自分のすべきことについて、祈って導かれましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど） ②どんな思いになりましたか？（気持や願いなど） ③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか） ④この世にあって何を実践しますか？

23日 土曜

コリント I



7:17 ただ、それぞれ主からいただいた分に
応じて、また、それぞれ神から召されたとき
のままの状態です。私はすべての
教会に、そのように命じています。

7:18 召されたとき割礼を受けていたのなら、
その跡をなくそうとしてはいけません。また、
召されたとき割礼を受けていなかったのなら、
割礼を受けてはいけません。

7:19 割礼は取るに足りないこと、無割礼も取
るに足りないことです。重要なのは神の命令
を守ることです。

7:20 それぞれ自分が召されたときの状態にと
どまっています。

7:21 あなたが奴隷の状態で召されたのなら、
そのことを気にしてはいけません。しかし、
もし自由の身になれるなら、その機会を用い
たらよいでしょう。

7:22 主において召された奴隷は、主に属する
自由人であり、同じように自由人も、召され
た者はキリストに属する奴隷だからです。

7:23 あなたがたは、代価を払って買い取られ
たのです。人間の奴隷となしてはいけません。

7:24 兄弟たち、それぞれ召されたときのまま
の状態です。神の御前にいなさい。

パウロはコリントの教会のクリスチャンたちに具
体的な指示を書いています。具体的であるというこ
とは現実の状況に即して考えられているということ
ですから、他の教会や他の時代などでは通用しない
場合もあります。パウロは「私は、すべての教会
で、このように指導しています。」という表現で、
あくまでも自分自身の指導方であることを示
唆しています。

これらは絶対永遠の命令ではありませんが、当然、

多くの教会に当てはまることでもあります。ただ
大切なことは、字義通りの律法として受け取っ
て”これは禁止、あれは容認”という規則的理解
ではなく、そこにある霊的な真理です。

パウロは割礼の「跡をなくそうとしてはいけま
せん」というからといって、割礼派ではありません
し、「割礼を受けてはいけません」と言っている
からといって、無割礼派でもありません。割礼
の有無が信仰の価値基準にはならないというこ
を言いたいのです。

また「奴隷の状態で召されたのなら、そのこと
を気にしてはいけません。」と言ったからといっ
て、奴隷制度支持者ではありません。奴隷か自由
人かに左右されずに神の幸いや恵は与えられると
いうことを言いたいのです。

”これこれをしてはいけない”とか”この方が
より信仰的だ”というような、律法的・外面的信
仰基準はさばきや分派を起ししやすいものです。
また社会問題・政治問題もそれを信仰と混同させ
るとさばきや分派を起ししやすいものです。主の
恵やみざわはそれらを越えているのだという真理
に立ち続けましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の
約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（気持や願
いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなた
の部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



7:25 未婚の人たちについて、私は主の命令を受けてはいませんが、主のあわれみにより信頼を得ている者として、意見を述べます。

7:26 差し迫っている危機のゆえに、男はそのままの状態にとどまるのがよい、と私は思います。

7:27 あなたが妻と結ばれているなら、解こうとしてはいけません。妻と結ばれていないなら、妻を得ようとしてはいけません。

7:28 しかし、たとえあなたが結婚しても、罪を犯すわけではありません。たとえ未婚の女が結婚しても、罪を犯すわけではありません。ただ、結婚する人たちは、身に苦難を招くでしょう。私はあなたがたを、そのような目にあわせたくないのです。

7:29 兄弟たち、私は次のことを言いたいです。時は短くなっています。今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。

7:30 泣いている人は泣いていないかのように、喜んでる人は喜んでいないかのように、買う人は所有していないかのようにしていなさい。

7:31 世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。

7:32 あなたがたが思い煩わないように、と私は願います。独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。

7:33 しかし、結婚した男は、どうすれば妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、

7:34 心が分かれるのです。独身の女や未婚の女は、身も心も聖なるものになろうとして、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうすれば夫に喜ばれるかと、世のことに心

を配ります。

7:35 私がこう言うのは、あなたがた自身の益のためです。あなたがたを束縛しようとしているわけではありません。むしろ、あなたがたが品位ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるようになるためです。

7:36 ある人が、自分の婚約者に対して品位を欠いたふるまいをしていると思ったら、また、その婚約者が婚期を過ぎようとしていて、結婚すべきだと思うなら、望んでいるとおりにしなさい。罪を犯すわけではありません。二人は結婚しなさい。

7:37 しかし、心のうちに固く決意し、強いられてではなく、自分の思いを制して、婚約者をそのままにしておこうと自分の心で決意するなら、それは立派なふるまいです。

7:38 ですから、婚約者と結婚する人は良いことをしており、結婚しない人はもっと良いことをしているのです。

7:39 妻は、夫が生きている間は夫に縛られています。しかし、夫が死んだら、自分が願う人と結婚する自由があります。ただし、主にある結婚に限ります。

7:40 しかし、そのままにしていられるなら、そのほうがもっと幸いです。これは私の意見ですが、私も神の御霊をいただいていると思います。

クリスチャンや教会のあり方が聖書的であるということは何よりも重要なことです。どんな人間的な事情があろうとも、人間を越えた不思議な現象があったとしても、聖書から離れてしまっただけでは、神の栄光も勝利も、解決も前進も、維持も存続も望めません。そればかりか異端となって神に敵対するものにならないとも限りません。

当然パウロは聖書的です。しかし聖書があら

る時代のすべての事柄に指示を与えているわけではありません。そこでパウロは「主のあわれみにより信頼を得ている者として、意見を述べ」ています。これもまた聖書的な態度です。ただしそれは「信頼」が必要で、信仰の共同体の中で認められる必要があります。

「危急のとき」とは終末が考えられていたわけですが、その後の迫害に関して聖霊は考えておられ、結婚のことをパウロに語らせたのでしよう。様々な事例に共通するように、結婚はただ自分の願いを優先させるのではなく、主のみこころと主のときを熟慮し、主の栄光と証のためにするべきです。

しかし「束縛しようとしているものではありません。」とあるように、結婚は個人の意思が尊重されるものです。そしてそれだけに強く確かな聖書的信仰が必要なのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（気持や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

